

「老いの言説」による効果 ～プラトンの『パイドン』とキケローの『老年について』～

畑山 浩昭

はじめに

プラトンの『パイドン』¹は、ソクラテスが刑に処される日の朝、牢獄に集まった弟子たちとの対話を題材としたテキストである。実際に牢獄での対話に居合わせたパイドンが、後日、エケクラテスに語り伝えるという形式になっている。したがって読者はエケクラテスと同じような立場からパイドンの語りを聴き、ソクラテスとその弟子たちとの対話について知ることになる。肉体は滅びても、魂は不死であることを、ソクラテスが論証する構成になっている。

キケローの『老年について』²（以下、『老年』）は、キケローが親友のアッティクスに献じた言説である。共に老齢に近づきつつあることから、老年をテーマにして書き記したとされている。このテキストは、長老マルクス・カトーが、ラエリウスとスキピオーという文武に秀でた二人の若者を自分の屋敷に招き、老いと死について語るという形をとっている。『パイドン』の場合と同じように、読者はこの若者と同じような立場から、老いと死についてのカトーの論議に耳を傾けることになる。人は、生き方を間違わなければ、実り多い豊潤な老年期を迎えられ、むしろ若い時よりも望ましい状態になることを、カトーが説き明かす構成になっている。

このふたつのテキストは、肉体と魂、老いと死というテーマについて言説を構築しているが、人間の魂や死後の世界は視覚的に把握できないので論証には工夫を必要とする。老いや死は一般的には悲観的な概念で語られるが、『パイドン』や『老年』ではむしろ利益として捉えられている。プラトンやキケローが、これらのテキストの語り手であるソクラテスやカトーを通して、どのように言説を構築したか、拙論ではこれらを「老いの言説」として、レトリック的な観点から考察を試みる。生と死、肉体と魂、若者と老人などの二項対立的な概念を基本としながら、魂の分離や解放の論証、善を追求する理由、存在の永続性などの言説が構築される。これらの言説がオーディエンスに与える意味や効果という側面から分析する。

現実に生きる大衆への忠告

プラトンの『ソクラテスの弁明』³（以下、『弁明』）に登場するソクラテスは、一般大衆や政治家、詩人、修辞教師と呼ばれたソフィストなどとは異なり、彼らよりも知恵のある人物として描かれている。他者よりもソクラテスの方がより賢明であるということの根拠は、多くの人々は善や美について何も知らないにもかかわらず知っていると感じており、知っているかのような話ぶりをするのに対し、ソクラ

テスは何も知らないということを知っており、そのことを自覚した言動をとっているという点において優れているという主張である。いわゆる「無知の知」として知られているソクラテスの知恵である。

しかしこのことが災いし、結果的にソクラテスが法廷で裁かれ、処刑される運命になることが語られる。ソクラテスは他者に対してその人が無知であることを論証する行為を行ってきた。それを神への奉仕の事業としており、よかれと思って行ってきたことである。しかしこの行為は、人々の無知を露わにすることから、多くの人々の心の中に反感や敵意を生み出し、ソクラテスは誹謗を受けて、最終的には法廷の場で死に追いやられるという結末に至る。無知である大衆が、無知であるが故に、ソクラテスに刑を処するという皮肉な話である。ソクラテスは、自分が有罪となる最後の場面で、人々が正しい判断を行わないことに対しての忠告を与える。

私に死を課したる諸君よ、私は敢えて諸君に言う、私の死後直ちに、諸君が私に課したる死刑よりも、ゼウスにかけて、さらに遥かに重き罰が、諸君の上に来るであろう（『弁明』、p. 64）

『クリトン』⁴は、ソクラテスが法廷で行った弁明の後、牢獄において、クリトン（老友）とソクラテスの対話を描いたテキストである。ソクラテスはクリトンとの対話の中で、「多衆」の意見と「専門家」の意見について、一定の見解を提示する。多衆の意見を尊重すべきか、あるいは専門家の意見を聞くべきか、つまり「どちらの意見を尊重すべきか」という問いから議論は始まり、「どちらの意見がより有益か」という問いに移り、最終的には「知者の意見が有益で、無知者の意見は有害である」という結論に至る。知者は神であり、神の知を伝えられる人間であるが、それがまさしくソクラテスが目指す人間像である。その使命からソクラテスは、人々を“覚醒させ、説得し、非難することを決してやめないのである”（『弁明』、p46）。

人々に対するソクラテスのこの態度は、拙論が考察の対象とする「老いの言説」を理解する上で重要である。というのも、言説を経験する対象者はソクラテスの友人や弟子、その延長線上には市民、一般大衆、読者という広義のオーディエンスが存在するからである。「無知」なる人々が、無知であることを自覚していないことが前提であるとする、これから新たに「知る」という余地がオーディエンスに残されていることになる。そこに真偽、善悪、美醜の知を吹き込むことによって、新たな自覚や認識が生まれる。生と死、肉体と精神、老いなどについて、固定化された認識を改める機会を得ることができるのである。

大衆を誤った認識に向かわせるのは、誤ったレトリックであるが、知者としてのソクラテスのレトリックは、多衆から誹謗を受けようとも、真を追求し、相手が誰であってもその無知を知らしめる論証を行いながら新たな知を吹き込み、良き方向に大衆を向かわせようとする。したがって、この言説の効果としてオーディエンスがどのように変わりえるかが、レトリック的な視点としては重要なのである。

魂と肉体の分離から、真実と現実の区別へ

『パイドン』では、人間の魂は不死のものとして描かれ、肉体から分離し解放される、独立した存在として論じられる。“死とは、魂の肉体からの分離に他ならない”としている (p. 30)。人間の生存を肉体と魂に分けることで、肉体は老いて死するとも、魂は死なないという新たな議論の展開と知の獲得が可能となるのである。一般的に老いて死すことが肉体も精神も同時に減びることと理解されているのであれば、この分離によって、体は死んでも魂は生き残るというあらたな真理が希望としてオーディエンスに与えられることになる。

この証明を確固たるものに仕上げるためには、魂そのものが独立した存在として可能であることを説得的に描かなければならない。そのために魂に主体性を持たせるが、特筆すべきは、魂が肉体の被害者として扱われることである。

魂が肉体と協同して何か考察しようと試みれば、その時には、魂は肉体によってすっかり欺かれてしまうのは、明らかだ (『パイドン』、p. 32)

肉体は魂を惑わし、魂が肉体と交われば、肉体は魂が真理と知恵を獲得することを許さない、と考えるからである (『パイドン』、p. 34)

ソクラテスによって語られる魂は、一貫して純粋な存在であり、主体性を有し、本来ならば魂自らが物事そのものを見る力を有しているのだが、肉体に宿っている間は、肉体の快楽や、欲望や、苦痛や、恐怖に影響されてしまい、本来見えるものが見えなくなっていたり、その独自性を失っていたりするものとされている。つまり、肉体は悪であり、魂は善なのである。

この状態を打破するためには、浄化 (カタルシス) が必要であると説く。

浄化 (カタルシス) とは、足枷のごときものである肉体から解放されて、魂ができるだけ自分自身だけで単独に生きるように習慣づけることではなかろうか (『パイドン』、p. 37)

魂が肉体によって捕らえられているかのように描かれることで、オーディエンスに示されるメッセージは、「魂を肉体から救い出し、その純粋性を守らなければならない」という一種の使命感である。生死の議論から一歩進んで、いかに魂を肉体から解放して永遠の生を獲得するかという問いに変わっていくのである。いわば、一人一人の人間が、その肉体ではなく魂と共に在り、永続的な生を求めることになる。

プラトンがソクラテスに語らせるもう一つの思想として、「アイデア」がある。『パイドン』においても、プラトンが考えるアイデア論の前提である「真実の世界」と「現実の世界」という区別が見え隠れする。真実の世界には、様々な物事についての普遍的なアイデアがあるが、我々が生きる現実の世界では、不完全な形で現されおり、また、それとしての限度や限界がある。現実の世界における物事はすべて衰退し、減ぶことにつながる。したがって肉体は減びるが、魂は、肉体と分離され、純粋にそれ自身になることで、アイデアの姿、真実の世界に近づき、それとして恒常的な同一のあり方を保てるとしている。

魂は、、純粋に自分自身だけになり、、、さまようことを止め、かの永遠的なものに関わりながら、いつも恒常的な同一の有り方を保つのである、、魂のこの状態こそが知恵（フロネーシス）と呼ばれるのではないか（『パイドン』、p. 76）

アイデアが存在する真実の世界に近づくためには、ある種の浄化（カタルシス）を必要とし、カタルシスによってこそ、本物の知恵を獲得することができるとしている。魂は、人間の中に入っているが故に、肉体の影響を受けてしまうが、できるだけ肉体から離し、浄化し、それとして育てることで、真実の世界に行くことができる。現実の世界から真実の世界に移ることができるということは、現実の世界において死が訪れても、真実の世界で永遠の生を獲得することができることにつながるという論理である。この段階でオーディエンスは、真理による知恵、永遠の生を獲得するために、「どのように魂を扱えば良いか」という問いを与えられるのである。

真理と永続のための善行

魂と肉体の分離、肉体からの解放を前提とする場合、「どのような魂でも解放され、真実の世界に入り、永続性を担保されるのか」という疑問は残る。なぜなら、善人の魂も、悪人の魂も、同じように解放されるのであれば、オーディエンスは納得しないからである。これにはソクラテスは明確に答えており、魂をどのように扱うべきかという問いと関係づける。

死がすべてのものからの解放であったならば、悪人たちにとっては、死ねば肉体から解放されると同時に、魂もともに自分自身の悪からも解放されるのだから、それは幸運な儲けものであただろう。しかし、いまや、魂が不死であることが明らかな以上、魂にとっては、できるだけ善くまた賢くなる以外には、悪からの他のいかなる逃亡の道も、また、自分自身の救済もありえないだろう。（『パイドン』、p. 153）

つまり、善行や賢明な言動の結果として、魂を肉体から解放でき、それとして自立させ、真実の世界による知恵を得て、永続的な生を得られるということである。現実の世界で生きている限りにおいては、肉体に起因する様々な欲求に動かされてしまうが、哲学者のように純粋に真理を求め、善を行い、美を追求することが要求されるのである。

この発想は、キケローの『老年』にも引き継がれている。老年を迎えることで肉体が衰えたり、欲求が弱まったりすることは悲観すべきことではなく、むしろ喜ばしいことであり、また、若い時からの善行の結果として、老年期が素晴らしい時期になるとしている。

『老年』の語りの主体であるカトーは、これを論証するための最初の段階として、老年を惨めなものと思わせる理由を四つ述べて、そのひとつひとつについて反論する手法をとっている。

老年が惨めなものと思われる理由は四つ見出される。第一に、老年は公の活動から遠ざけるから。第二に、老年は肉体を弱くするから。第三に、老年はほとんどすべての快樂を奪い去るから。第四に、老年は死から遠く離れていないから。『老年』、p. 22)

ここでは社会的な活動からの疎遠、体力の衰弱、肉体的欲求の衰退、そして死への直面という、人間が老齡期に向かい合う一般的な問題が示されている。しかしカトーは、体力の衰弱はあっても知力や精神力はむしろ老年期に向上するとしている。また、肉体的な欲求は衰退ではなく解放であるとし、死は恐れることではないと言う。さらに、徳を積んだ老人のもとには多くの人々が訪れる、つまり、社会のほうから近づくという議論を展開する。特に、善を行い、徳を積むことが老年に関するすべての課題を解決するという発想に立っている。

老年を守るに最もふさわしい武器は、諸々の徳を身につけ実践することだ。『老年』、p. 16)

カトーはこのように設定したあと、まず、人間の最高の知力や見識などは、老年こそが持ち得るもので、それらこそが、大事業を成し遂げる要因だとする。

肉体の力とか速さ、機敏さではなく、思慮・権威・見識で大事業はなしとげられる。老年はそれらを奪い取られないばかりか、いっそう増進するものなのである。『老年』、p. 24)

また、肉体的な快樂は悪行と関係があり、肉体的な快樂から解放されることは悪からの解放であると同時に、精神世界へ集中し、知力を高め、賢者となれる機会であるとする。

自然が人間に与える病毒で肉体の快樂以上に致命的なものはない。この快樂を手に入れるために、飽くことを知らぬ意馬心猿の欲望がかきたてられるからである。祖国への裏切り、国家の転覆、敵との密談、皆ここから生まれる。要するに、快樂への欲望に急かされて手を染めずに済む罪や悪行はないのだ。『老年』、p. 42)

味わえる限りの肉体の快樂に衝き動かされている人間を想像してみるがよい。そんな喜びにひたっている限り、何ひとつ精神を働かせることはできぬし、何ひとつ理性や思索で達成することはできぬ、ということは誰の目にも明らかだと思う。『老年』、p. 43)

老年期においても、人々から尊敬され、その力を維持できる人物になるためには、上述の体力の衰退から知力の向上への転換、肉体的な快樂からの精神の解放などが必要であるが、そのためには若い時から善を行い、徳を積むことが重要であるとする。

わしがこの談話をとおして褒めているのは、青年期の基礎の上に打ち建てられた老年だとい

うことだ …、言葉で自己弁護をしなければならぬような老年は惨めだ…、まっとうに生きて前半生は、最期に至って権威という果実を摘むのだ。(『老年』、pp. 60-61)

したがって、現実の世界で徳を積み、善を行い、精神を高め、真理を追求するという考え方は、プラトンからキケローへ継承されている思想であると言える。実際にプラトンの思想を間接的に引用している部分が、『老年』に見られる。⁵ どちらも老いや死への恐怖が前提となっているが、それらを克服するための方法として、生きているうちに、できるだけ肉体から魂を解放する努力をしたり、真理を追求したり、善を行い、徳を積むことなどが指南されているのである。

「自然」による説明

『パイドン』でも『老年』でも、最終的には生死に関する問いや、死後の世界が語られている。プラトンは魂と肉体の分離、イデア論、及び、真実と現実の世界の相違は論証的に示したものの、死後の世界については、「神話」を引用することに留めている。キケローは、基本的な思想はプラトンを踏襲するものの、「自然」という概念で生死の説明を試みている。

人生の行程は定まっている。自然の道は一本で、しかも折り返しがない。そして人生の各部分にはそれぞれその時にふさわしい性質が与えられている。少年のひ弱さ、若者の覇気、早安定期にあるものの重厚さ、老年期の円熟、いずれもその時に取り入れなければならない自然の恵みのようなものを持っているのだ。(『老年』、p. 37)

われわれは肉体というこの形骸の中に閉じ込められている限り、自然の掟が定めた務めと思いい仕事を果たさねばならぬのだから。というのは、魂は天に属するもので、至高の住処から下げおろされ、神の本性や永遠性とは正反対の場である地上に、いわば沈められたものなのだから。(『老年』、p. 71)

また、死そのものについても、無理に証明を試みず、もしも魂が持続し、天の世界に行けるのであれば、好ましいことであるとする仮定上の話として位置づけ、最終的には「自然」の中で説明する。

死というものは、もし魂をすっかり消滅させるものならば無視してよいし、魂が永遠にあり続ける所へと導いてくれるものならば、待ち望みさえすべきだ。第三の道は見つけようがないのだ。(『老年』、pp. 63-64)

われわれは不死なるものになれそうにないとしても、やはり人間はそれぞれふさわしい時に消え去るのが望ましい。自然は他のあらゆるものと同様、生きるということについても限度

を持っているのだから。(『老年』、p. 78)

こうしてみると、プラトンの『パイドン』とキケローの『老年』の大きな違いは、プラトンが現実世界における肉体の死後、魂とイデアから成る真実の世界に生きるための主体性を描くことに対し、キケローは、現実の世界の最終章である老年を自然のプロセスとして説明していることである。共通点は、どちらのテキストにおいても現実に生きる中で、真理を追い求め、肉体的な欲求から離れ、節制し、善を行い、徳を積むことが、豊かな老年期、そして、恐れる必要のない死後の世界にたどりつけることとしてい

言説の効果

オーディエンスが有している一般的な思いが、老いに対する悲観や死に対する恐れであり、それらが前提として共有されている場合、それらを克服するための言説は需要が高くなる。『パイドン』でも『老年』でも、肉体の欲求に基づいて達成できることや、取得できることを失うことへの喪失感や、若い時にはできていたことができなくなることへの怖れなどが批判されているが、それらを阻止する言説ではなく、肉体に引きずられてきた魂を、それとして独立させ、高めることにより、肉体的なはかなさ、怖れ、喪失感から解放され、精神的な幸福へと向かうことができるという言説が構築されている。また、肉体的な生き方をしていると、絶望し、生きる希望を失うが、精神や魂の成長に集中することで、快樂や苦悩から解放され、生きる希望を見出せるという議論が重ねられる。

老いや死の恐れを超越し、克服するための確かな方法は、「善く生きることである」と結ばれる。節制して善く生きること、魂を育て上げ、自然や神からイデアを学び、できるだけ真実の世界にたどり着くことができる。正しい事実を得て、正しく理解し、正しい判断をした上で、世の中のために正しい行いをするのが、豊かな老齢期につながり、恵まれた人生を終えることができる。

結局これらの言説は、社会的な市民教育となっているのである。善く生きることの理由を、老いや死の克服に直接的につなげることで、倫理性の高い人間が生まれ、徳に満ちた社会が維持されることにつながるのである。したがってオーディエンスの立場から『パイドン』と『老年』のテキストを読むと、老いや死、肉体と魂の題材とした言説を経験するが、その効果としてこのテキストは大衆の生き方そのもの、及び、社会に倫理性や道徳性を付加する指南書として機能するのである。

1 プラトン、『パイドン』(岩田靖夫訳)、岩波文庫、岩波書店、2013(初版 1998)。

2 キケロー、『老年について』(中務哲郎訳)、岩波文庫、岩波書店、2015(初版 2004)

3 プラトン、『ソクラテスの弁明』『クリトン』(久保勉訳)、岩波文庫、岩波書店、2015(初版 1927)

4 同上

⁵ キケロー、同上、p. 72